

令和2年度（2020年度）女子美術大学大学院博士前期課程 インタラクティブ空間演習の後期課題（そして、講義のまとめに代えて）

2021年1月13日
講義担当：石井拓洋

index

- 1.【課題出題の背景：出題者より】
- 2.【問題点の抽出、論点、問いの確定：出題者より】
- 3.【課題：皆さんに考えてもらいたいこと】 ←（これが後期課題内容です）
- 4.【おねがい：課題レポートを書く上で】
- 5.課題の提出方法

● 1.【課題出題の背景：出題者より】

あいちトリエンナーレ2019の問題にみるとおり、昨今、藝術作品の解釈では、必ずしも「みんな違ってみんないい」（金子みすず）のみで済ますことができず、あえて今、〈正しい〉解釈の可能性を探る議論が求められている。藝術大学がこれを議論をしないならばどうして藝術大学といえようか。そこで今期の講読では、この議論を進める上での基盤となりえる有益な先行研究を取り上げて検討した。

本年度の論文講読を通じて、渡辺裕と佐々木健一はそれぞれ主張の違いが顕になったが、一方で、彼らがグライスの語用論の視点を共有することで、むしろ議論における共通点が見出せることにここでは着目したい。それは藝術作品が鑑賞者に対して「意味」をもたらす時の前提条件として、藝術家が鑑賞者に対し「コミュニケーションを行おうとする姿勢」（渡辺 p.87、以下これを「一般的意図」と表す）を指摘することである。両者はこの前提条件に基づいて、さらに共通する基盤で議論を進め、藝術家による「一般的意図」の具体的な顕れは、藝術作品が無駄のない「有機的構成をもった統一世界」を形作る点にこそあるとする。

このように、両者の主張に差異はあるが、しかし、両者が共通するのは、藝術作品の意味の基盤にあるのは「一般的意図」であり、藝術家における「一般的意図」の顕れは、実際の作品が「有機体的構成をもった統一世界」の具現に指摘されていることである。

● 2.【問題点の抽出、論点、問いの確定：出題者より】

しかしながら、渡辺論文を巡って両者（渡辺と佐々木）が実際に議論した1984年から30年を経た今日、あらためて昨今の現代アートの認識を用いて両者の議論を再検討すると、彼らのいう、藝術家における「一般的意図」のあり方が、作品における「有機体的構成」に限定されており、それ以外の「一般的意図」のあり方を探る姿勢が不足しているのではないかと考えられる。私（本課題出題者）には、両者における当時の議論の限界が、そもそもこの点にあるように思われた。一体、当時の両者が述べたように、本当に「有機体的構成」以外に藝術家の「一般的意図」の顕れは存在しないのだろうか？ 両者の議論を先行例として、今日において、このような議論も有意義ではないかと考える。

● 3.【課題：皆さんに考えてもらいたいこと】

そこで、受講生には後期課題として以下を考察願いたいと思います。

今期の講読では、藝術家が鑑賞者に対し「コミュニケーションを行おうとする姿勢」(「一般的意図」)は、藝術作品の〈正しい解釈〉を行う上で重要な可能性をもち、その意味で「一般的意図」は重要であるという趣旨の議論を検討してきました。今回の論文の範囲では、藝術家が鑑賞者に対し「一般的意図」として、作品内に「有機体的構成をもった統一世界」を作り上げることのみが議論されていたように思われます。

しかし、本当に「有機体的構成」以外に藝術家の「一般的意図」の顕れは存在しないのでしょうか？ そもそも渡辺らが議論していたのは1980年代においてです。現代アート状況を踏まえると、彼らとは違った議論もできるのではないのでしょうか。

そこで、あなたの考えを教えてください。あなたは、藝術家が鑑賞者に対し「コミュニケーションを行おうとする姿勢」を示す事柄として、作品を無駄なく「有機体的構成」として真面目に作る以外、他に何かあるとおもいますか？
このように問われたら、あなたはYesと言いますか？ Noと言いますか？ 後期課題ではこの質問に答えるためのレポートを書いて提出してください。レポートでは冒頭にYesまたはNoの結論を明確に示した上で、その後、各自の結論の理由を、過去の研究者らの指摘を引用したり、具体的な作品を例示しながら、なぜYesまたはNoと結論できるかをわかりやすく説明してください。

● 4.【おねがい：課題レポートを書く上で】

今回の課題で求めているのは、主観的な藝術的的文章を用いた創作的自己表現行為ではなくて、いわば、より客観的な見解を導くための「思考実験」を行うことです。そのために、この課題を考察する前に是非守ってほしいルールがあります。それは、課題に取り組む時には、受講生各位のそれぞれの独自の藝術観は一度保留し、一旦、各自が渡辺らと同じように、藝術作品が鑑賞者に対して「意味」をもたらす時の前提条件として、藝術家が鑑賞者に対し「コミュニケーションを行おうとする姿勢」を必要とするという立場とり、そこから考察してほしいということです。

なぜなら、このような姿勢こそが「先行研究を検討する」という、研究を研究として成立させるための最低条件なのであり、そしてまた、本授業を通して身につけてほしい最低限の研究上の一般的作法の一つだからです。このような考察の道筋を経ることで、大学院という専門的な研究者社会内で有意義に議論を進めることができ、また、もしあなたが渡辺らの議論に批判的であるならば、それによってこそ、渡辺らの議論の限界を有効に示すことができるのではないのでしょうか。

● 5. 課題提出の方法

【留意事項】

- ・ 体裁良い分かりやすすぎる文章ではなくて、複雑で少し解りにくくても深く考えた本音の内容を求めます。
- ・ ↑ なぜなら、この世や人間のことで、「あまりにも分かりやすすぎること」など無いと思うからです。
- ・ 作成する論考の長さ（字数）は不問。目安として約 2000 字程度。なお、これより長くても構わない。
- ・ 引用や参照した文献資料の「正確な書誌」を記述すること。中国語など英語以外の文献は書名を日本語訳すること。
- ・ 今回の論文（レポート）には次のタイトルをつけてください。なお、必要ならば副題は自由につけても良いです。

『 作品の「有機体的構成」のほかに、アーティストの「一般的意図」のあらわれは存在しないのか？ 』

【課題提出方法・提出期限】

- ・ 論考は PDF ファイルとして作成の上、メールに添付して、下記、提出先メールアドレスまで送信する。
- ・ 提出は、明日から最終期限日まで、随時受け取る。
- ・ 提出最終期限は「2021年2月20日（土）23:59」までとする。
- ・ つまり最も遅くて、2021年の2月20日（土）の夜までに、論文 PDF ファイルをメールで送信してください。

【課題提出メール件名】

- ・ 課題提出メールには、下の通り、メール件名をつけること。
「女子美院インタラクティブ空間演習後期論考 2020」

【課題提出完了の確認方法について】

- ・ 課題提出者には「受理確認メール」が返送される。その受信をもって提出は保証される。
- ・ 確認メールは、提出があった翌日までには送信される。
- ・ 課題を提出したが、「受理確認メール」が届かない場合は、石井まで問い合わせること。

【提出先メールアドレス】

takuyo.ishii @ gmail.com （石井宛）

以上です。みなさんの今後の幸運をお祈りします。